

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第47号

平成29年5月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

時代の風を読み、先を見通していた赤松円心

長男、次男を尼崎に、三男を叡山に置く布石

雨の中、15人の会員出席

4月11日の第29回例会の日は、前日からかなりきつい雨が降り続き、加えて強風が吹き、ここかしこで桜吹雪が乱れ飛ぶ中、集まりが悪いのではないかと気をもんでいたところ、杞憂に終わってしまった。

新年度からは、教育文化センターの2階ホールでの例会となり、南北が窓ガラスで明かりが差し込み、開放感たっぷりの会場に、一人、二人と、定刻には最近では珍しい15人もの会員が集まった。

異口同音に、新しいことを知る喜びがあり、ますます正行が好きになり、もっと知りたい、学びたいとの思いが強くなって、おのずと足が向かうとか。

史料の極めて少ない楠氏、正行公ではあるが、楠氏、そして正行公に関わりのある人物を一人一人学びながら、正行公の人物像をあぶり出そうと続けてきた例会での学びで、私を含めて、誰しもが新たな発見をしているようである。

播磨の豪族、赤松円心

今月は赤松円心を取り上げた。

正成に呼応して立ったが、後醍醐天皇からの恩賞にあらずかれず、播磨の守護職にとどまりながらも内裏造営の用材調達に動くも、護良親王の失脚とともに建武政府での勢力を失った赤松円心。

尊氏、鎌倉に降るに当たり次男貞範を従わせ、尊氏への強力を明らかにするとともに、西国に落ちる尊氏を援け、光源院の院宣を受けんことを進言。その後白旗城を築き、尊氏の東上に道を拓き、正成亡き後、尊氏から播磨守護職に任じられた円心。

三男の則祐を比叡山の護良親王のもとに置き、長男・範資と二男・貞範を尼崎（長洲）において、新しい政治台頭の布石とするなど、正成同様に先を見通した武将像が見えてくる。

以下の赤松氏年表は、人物叢書「赤松円心・満祐」より抜粋し、一部扇谷が補注したもの。

◆赤松氏略年表

和暦	西暦	事項
弘安2年	1279	赤松則村(円心)、赤松茂則の子として生まれる。幼名次郎
嘉暦元年	1326	大学寺起請文書に、執行範資、惣追捕使貞範の名前。 摂津の長洲庄(長洲御厨)は魚類を淀の地に運ぶ「市」が立ち、流通・運輸の要衝であった。ここに、赤松円心は長男と次男を居住させていたことが読み取れる
元徳元年	1329	12月、護良親王、天台座主に。 則村の三男則祐、小寺相模の守頼季と共に宮の叡山に随侍
元弘元年	1331	8月、則祐、小寺頼季は護良親王に従い、比叡山から奈良、吉野におちる
3	1333	1月21日、円心、護良親王の令旨を奉じ、播磨で挙兵、備前三石城を破る 2月15日、円心、摂津に進み、麻耶山に城を構え、六波羅軍と戦う 3月12日、円心、摂津瀬川で幕府軍に大勝し、一気に京都に入る 4月、八幡の戦いで、円心の武将佐用範家が名越高家を討ち取り、次いで六波羅を攻略す 5月28日、円心、後醍醐天皇を兵庫福巖寺に迎える 8月、円心、播磨守護職に任じられる 播磨の守は園基隆＝後醍醐天皇の寵臣(公家)、播磨の介は新田義貞、その下に円心 ～ この時、円心に、公家の指揮下という救いが 9月、安積守氏に命じ内裏造営の用材を播磨三方山に伐らしむ 11月10日、新田義貞、播磨の守に ～ 円心、名実ともに新田義貞の配下に 公家の配下という精神的拠り所を外された円心 新田義貞、三方西庄を大徳寺に寄進 ⇒安積氏の用材伐り中止

建武元年	1334	6月、この頃、円心、播磨守護職を解任される ～ 護良親王に最も近い赤松の勢力を削ぐ狙いからか 10月、藤原藤房、天皇に直諫して円心を弁護し、次いで出世遁世する 護良親王、捕縛される ⇒ <u>護良親王の失脚とともに、勢力を失った赤松円心</u>
2	1335	7月、足利尊氏、鎌倉に下るに当たり、円心に乞い、次男貞範を従わしむ ● <u>尊氏への強力を明らかに!</u> 12月、箱根竹の下の戦いで、貞範、勇戦して新田義貞の軍を破る
3	1336	2月、円心、兵を率いて兵庫に來たり、敗走の尊氏を援く 円心、尊氏に対して光源院の院宣を受けんことを進言する この後、円心、白旗城を築く 3月、義貞、播磨に入り、範資を破る 4月、則祐、大宰府に赴き尊氏の東上を促す 5月、湊川の戦後、尊氏、円心を播磨守護職に任じる
正平元年	1346	貞範、姫路城築城に着手
2	1347	9月、範資、楠正行と天王寺に戦う(藤井寺の戦い)
4	1349	貞範、姫路城完成
5	1350	7月28日、円心、京都七条邸に没し、建仁寺大龍庵にて葬儀営まれる

関東御家人、はたまた播磨の豪族か

*高坂説 人物叢書「赤松円心・満祐」著者

- ① 則祐(三男)が、比叡山延暦寺に入った護良親王に仕えた時点で、円心の志は定まった
- ② 範資(長男)と貞範(次男)を、尼崎(長洲御厨)に住まわせ、播磨の流通を抑えるとともに、京の都の動静を探る拠点とし、新しい政治台頭の布石とした。
- ③ 赤松円心の祖、季房(村上天皇、第七皇子具平親王六代の苗裔、従三位三河の守)は、播磨、佐用に配流され、その末裔、赤松氏は田舎武士の頭領として仰がれるようになった。

*渡邊説 大阪観光大学客員研究員

「赤松氏関東御家人説」

- ・佐用荘は、関東御領で、一部が預かり所として、関東武士に与えられたこと
- ・六波羅探題は播磨の国守護を兼ねていたが、佐用荘は、配下の被官に与えられた
- ・赤松氏は鎌倉初期に関東御家人某が佐用荘に入り、「赤松」を名字とした
- ・赤松円心は、播磨の国守護常葉範貞と被官関係を結ん

だ

関東御家人説の立場に立つと、

範資と貞範は、海賊対策として、六波羅探題から尼崎に送り込まれた、と見ることができる

～ 悪党説の180度転換!

*中元説 播磨研究所所長・兵庫県立大学特任教授

赤松氏は、播磨の豪族で、流人となった季房の子孫

～ 関東御家人説の伝承が全くない

地域で作ったモノを大半、京にもっていかれる矛盾(荘園制度の弊害)

流通経済を制し、経済集団が軍事集団化

円心が建武政治と対立したのは、「歴史を前に進める」(荘園制度を壊す)ため

『時代の風を読む』…二人の息子を尼崎に、一人の息子を京に

赤松氏とは

- ・播磨を一つにまとめ上げた一族

- ・播磨の地政学的優位性の発見と活用

畿内から見れば辺境の地、西国から見れば畿内に一番近い国

- ・先進思想の展開

古代から播磨に蓄積された宗教的雰囲気をもとめ上げた

一族から大澄国師を生み、法雲寺を創建、則祐は宝林寺を創建

荘園制度の矛盾を指摘

<扇谷のまとめ>

高坂説・中元説によれば、赤松円心は単なる悪党というよりも、しっかりと時代の風を読み、布石を打つ、先を見通した武将像が浮かび上がる。

正成の一途さ・精神性に比べ、円心は、より現実主義者ではなかったか。

教文1階に「楠正行資料館」オープン

例会終了後、教育文化センターの1階に開設された「楠正行資料館」を見学した。

部屋に入ると、壁一面に正行通信が拡大バージョンで創刊号からズラーと掲示されている。そして、テーブルの上には、正行関連の図書、過去に教育文化センターが主催した教養講座のブックレット、そして正行ゆかりの史跡・施設のリーフレット類等が並んでいる。

教育文化センターに足を運んでいただくと、正行のことが理解でき、身近に感じていただけること請け合い。ぜひ、お訪ね下さい。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)